

海外に長期滞在する日本人研究者の減少

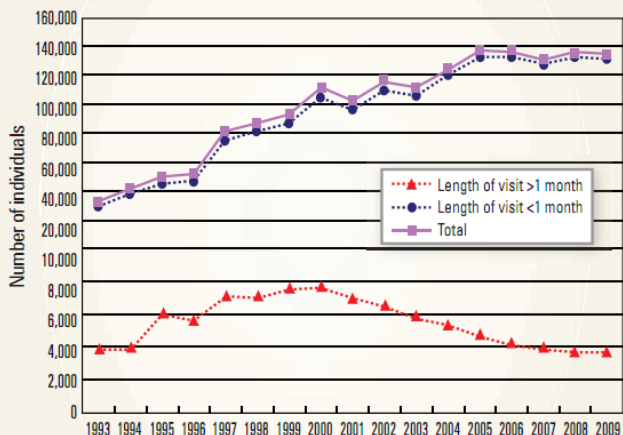
日本で博士号を取得したポスドク研究者や若い教員の間にも「内向き志向」が広がっているようです。米国の一流科学誌『Science』にも、この傾向を憂慮する内容のニュース記事が掲載されました。

昨年10月の文部科学省の発表によると、海外に1カ月以上滞在した日本人研究者の数は、2000年の7674人から、2009年の3739人に大きく落ち込んだそうです（グラフ参照）。また科学技術政策研究所の調べによると、2002年から2006年の間に日本で博士号を取得した60535人のうち、ポスドク等で海外に滞在した人は2%にすぎなかったとのことです。

その原因としては、海外研修のための予算の不足、新規教員の教鞭に割く時間や事務作業等の負担の増加に加えて、海外に出ることによってコネを失ってしまうことを恐れる気質があるとの記事では指摘しています。

このような状況を改善するための一助として、ニュースレター「かけはし」では海外の研究環境に関する生の声や、留学生による体験談を皆様にお届けしていきます。今後ともご期待下さい。

JAPANESE SCIENTISTS MAKING OVERSEAS VISITS



出典：
Science 10 December 2010:
Vol. 330 no. 6010 p. 1475

“Will Homebody Researchers Turn Japan Into a Scientific Backwater?”
Dennis Normile

目次

日本人研究者の海外滞在の傾向	1
ビザに関して (丹 恵)	2
寄稿 留学体験記 (高橋 聖)	3 4
カーネギー・メロン大学 物理学科 紹介 (飯山 悠太郎)	4 5
わが街紹介 ミシガン・アナーバー (岡田 遼嗣)	6
お薦め本 『明治・父・アメリカ』 (嶋津 直之)	7

この度の東日本大震災でお亡くなりになられた方へのご冥福を心よりお祈り申し上げます。また被害にあわれた方、ご不便な暮らしを送られている方々が一日でも早く復興し、元の生活に戻るよう願っております。

我々留学生の周りでも、今回の災害をききつけて家族を心配する声を寄せてくれたり義援金活動に参加して下さる外国人の方は多く、大変励まされました。

米国大学院学生会では日本の復興を海外から精一杯支援して参りたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

米国大学院学生会一同

はじめまして。ニューヨーク大学で留学生アドバイザーとして働いている、丹 恵（たん めぐみ）と申します。まず簡単に自己紹介から。私は、高校時代からアメリカへ留学したのですが、私の高校は長期留学が許可されていませんでした。両親に短大だけという約束で行かせてもらった、カルフォルニア州のコミュニティカレッジからずるずるとアメリカ滞在は続き、もう17年目になります。州立の大学で修士号をとっているときに留学生オフィスで働く機会に恵まれ、それがきっかけで今の仕事につながり、ニューヨーク大学で勤務してから来月で5年目になります。

私が大学生のころは学生ビザに関する法律なんて考えたこともなかったくらいなのですが、今は随分風向きが変わってきました。9. 11のテロの後、犯人の数名が留学生ビザで合法的にアメリカに入国していたという事実が明るみにでてから、法律が大変厳しくなりました。今では、在校生の留学生ひとりひとりが、どこに住んでいて、何を勉強しているのかを各学校がStudent and Exchange Visitor Information System (SEVIS) というデータベースを使って政府 (the U.S. Department of Homeland Security と U.S. Department of State) に毎学期報告しなければなりません。この1月には不法に留学生を受け入れていたとされる、カルフォルニアのある大学が摘発され、留学生の受け入れを停止させられるという前代未聞の事態も起こりました。今の留学生にとって、また留学を考えている方にとって、学生ビザの法律を正しく理解するのはとても大切なことなのです。このコラムを通じて、学生ビザや実際の留学生活について理解を深めていただけたらうれしいです。

初回の今回は、アメリカの留学生のビザについて説明します。アメリカでは勉強する期間の長さに関わらず、フルタイムの授業を受けるひとには「非移民ビザ」に属する、学生ビザの申請が必要です。観光ビザやビザ免除プログラムで就学することは禁じられています。学生ビザは大学院、大学、高校、語学学校で学ぶF-1ビザと、語学学校以外の専門学校で学ぶM-1ビザに分かれます。アメリカの大学で留学する場合、ほとんどの留学生がF-1ビザを取得します。しかし場合によっては交流訪問者ビザ、J-1ビザが適切な場合もあります。F-1ビザとJ-1ビザは取得する条件が違います。

<F-1ビザを取得する条件>

1. I-20を発給できる米国政府認可機関からフルタイムの学生として受け入れられていること。アメリカ政府から認可された教育機関が入学を許可した学生に発行するもので、このフォームに専攻、コース期間、入学予定日、卒業予定日が記載されています。
2. 学費と生活費を証明できること。I-20にはその大学でフルタイムの学生にかかる1年間の学費と生活費が記載されています。その費用が十分支払える証明として、銀行の残高証明または、その他の財政証明が必要です。この財政証明は本人、家族、その他の総合でかまいません。
3. 学力を証明できること。予定の学業に適した学力と英語力が証明できること。
4. 出国の意思があること。学生ビザは「非移民ビザ」なので、学業が終了した後はアメリカを出国する意思があること。

<J-1ビザを取得する条件>

1. DS-2019を発給できる米国政府認可プログラム機関から交流訪問者として受け入れられていること。
2. 学費と生活費を証明できること。F-1との大きな違いは、J-1ビザの費用の大半が自己負担ではない資本から支払われないといけないということです。つまり、J-1ビザを取得するには、大学や自国など第三者からの奨学金をもらっているというのが条件になります。これはJ-1ビザが2国間の交流を目的としたものであり、学生個人の就学を目的としたF-1ビザとの違いです。
3. 学力を証明できること。予定の学業に適した学力と英語力が証明できること。
4. 出国の意思があること。交流訪問者ビザは「非移民ビザ」なので、学業が終了した後はアメリカを出国する意思があること。また、J-1ビザは、出資がアメリカ政府もしくは自国のプログラムの場合、日本以外の国籍の場合は、留学中携わった専門知識・技能が必要とされる分野のプログラムの場合、または、研修を受けるために入国した医師の場合、交換プログラム終了後、自国に少なくとも2年間移住しなければならないという、2年間居住規定という決まりがあります。

留学する大学が米国政府から、I-20もDS-2019も発給できる教育機関で、学費と生活費の大半が自費以外で支払われる場合に限り、F-1ビザかJ-1ビザを選ぶことができます。F-1ビザもJ-1ビザもフルタイムの学生でなければならないという基本のルールは同じですが、プログラム終了後、何日間アメリカに滞在できるのか、または大学構内でのアルバイトに関するルールなど細かい違いがあります。選べる場合は慎重に、担当の留学生アドバイザーに相談されることをお勧めします。エール大学の留学生オフィスのウェブサイトにもF-1ビザとJ-1ビザを細かく、わかりやすく表にしててましたので、下記の資料をごらんください。

今回はアメリカの大学で留学する際に必要な留学生のビザについてお話ししました。アメリカは9月が新学期ですので、うちの大学では3月、4月が新入生のI-20やDS-2019の準備が一番忙しくなります。その仕事を担当している私の同僚の机の上は、世界各国から提出された銀行の残高証明

や、トーフルのスコアに埋もれています。この秋うちの大学に新入生として来る留学生は2500人位の予定です。その内、何人と実際に会えるかわからないけど楽しみにしています。

丹 恵

International Student Advisor/SEVIS Coordinator
Office for International Students and Scholars
New York University
561 LaGuardia Place
New York, NY 10012

資料:

<http://www.nyu.edu/life/student-life/international-students-and-scholars.html> (Office of International Students and Scholars, New York University)

<http://www.yale.edu/oiss/immigration/common/vs/index.html> (Office of International Students and Scholars, Yale University)

私がMITへ留学を目指した理由というのは、至極単純なものであった。

学部4年生の夏、学部の仲間と院試を意識し始め、進路を真剣に考え始めた頃、私の中にはいくつかの疑問があった。所属した研究室の先生方や先輩方に「研究」というものが何なのかを教えてください、この研究室で学べることは膨大にあり、学ぶためのリソースも潤沢であることは認識した。しかし、私の中には、どのような研究者を目指すべきか、研究者というキャリアを突き進むにあたって本当に必要なものは何か、という疑問が残った。もちろん、研究者になるための門をようやくたたき始めた当時の私にその答えが出るはずもなく、あるいは何をどうすれば答えが出せるのかという事さえ検討しなかった。ただ、未熟な思考でようやくひねり出した一つの結論は、もっと広い視野から研究、あるいはエンジニアリングというものを考えてみたい、実行したい、小さく綺麗に纏まった研究室に長く留まりたくない、という事だった。海外の大学院を選んだのは、併願などの問題と、せっかく他大学院を目指すなら普通ではないところ、というだけの理由であった。そのような突拍子も無い考えから実際に留学をし、その全課程を終えてみて、自分の当時の選択肢はその時の動機と照らし合わせて考えても辿り着いた現在からレトロスペクティブに考えても間違っていなかったように思う。

MITに来て最初に驚いた事は、あらゆる面での敷居の低さであった。研究でわからない事があれば、他学部だろうが他校だろうがわかりそうな人を探してメールを出し、場合によっては共同研究を提案する。教授であろうが誰であろうが、間違っていると思えば議論をする。先方もそれに真剣に応じ、わかるまで説明してくれる。学内外の研究者が頻りにセミナーをしにやってくるので、興味のある分野の研究とネットワーキングはいくらでもできる。research assistantshipから出る学費や生活費とも合間合間でそのような恵まれた環境で研究できる場所は世の中それ程多くはないだろう。また、研究以外でも、在学中に色々な経験をする事ができた。例えばSTeLA(*1)の設立と運営では、国際チームで研究とは違う形で一緒に仕事ができただけでなく、日本人のメンバーも、日本にいたら出会い共同でこのようなプロジェクトを行えなかったであろう方々ばかりで、非常に刺激的であった。学生という融通の利く立場を利用しつつ様々なポジション、経歴、考え方の方々と出会えるのも留学の醍醐味の一つであろう。

そのような密度の濃い留学生生活を終えた今、PhD課程で何を学んだのか、身につけたのか、ということについて少々考えてみた。

PhD卒業後に何をを目指すことにしても、PhDで行った研究を長い間そのまま続ける、という事は稀だろう。分野に特性もあるのだろうが、私の学部時代の指導教官もMITでの指導教官も教授職を得てから新しい分野に参入している。これは研究対象に対する興味の変遷もあるだろうし、ファンディングの取りやすさ、論文の掲載されやすさなどの問題もあるだろう。アカデミアに留まらず、インダストリー、もしくは他業種に転身をする場合には言わずもがなである。

いずれにしても、学び続けざるを得ない、常に新しい環境で新しい挑戦を探さざるを得ない、という時にPhDで何を学ぶか、その後、それを(履歴書を飾るという以外の意味で)どのように有効活用するか、ということは常に問題である。



高橋 聖 (たかはし さとし)

東京大学 工学部 機械情報工学科 卒業
MIT, School of Engineering,

Department of Mechanical Engineering 博士課程 修了

私の恩師が教えてくれたことで印象に残っている言葉というのはいくつかあるが、その中でも、“You teach yourself engineering, and I’ll teach you how to think like an engineer.” というものをよく覚えている。エンジニアリング(の基礎、手法、等)は自分で学べ、研究室ではエンジニアとしての思考方法を教える、というのである。具体的な知識や技法も勿論大事だが、研究室でPhDの学生として本当に学ぶべき、つまり、その後の研究人生で重要になってくるのはその思考法ではないだろうか、と私は思う。当然ながら研究分野が変わっても、あるいは、現行の研究手法、装置等が陳腐化しても、必要となる共通の考え方というものが、新しい分野に斬り込んだり研究環境が変わったとき、このようなものを武器に研究室をリードしてゆく必要があるのではなかろうか。

さらに、研究を行う上で、その「思考法」、「考え方」(どのような問題設定をするか、それをどの手法を用いて解くか、結果をどのように検証するか)を繰り返し突き詰めていったものが研究哲学なのだと思う。究極的に正しい考え方や万能な思考法があるわけではない中で、最終的には研究者本人のそれまでの経験と信条によって決まるそれを自分の中で養い育てる必要がある。研究手法や知識をベースとし、その上に思考法、さらにトップに哲学が乗ったその構造を自分の中で構築していくのがPhD課程でやるべきことなのかもしれない。

就職活動の時期になると、MITには様々な企業のリクルーターがやってくる。それは工学的な研究開発を行っている会社だけでなく、金融、コンサルティング、法律事務所なども含まれる。もちろん各学生の専門的知識を求めて雇う場合もあるが、それ以上に、問題解決能力、パー

*1 Science and Technology Leadership Association <http://web.mit.edu/stela-mit/jp/>

『留学体験記』 (続き)

スペクティブ、発想力を求めてリクルートする事も多々ある。米国ではあらゆる企業がPhDホルダーを優遇するのはそのような理由がある。

私も博士課程修了にあたって就職活動を行った訳だが、リーマンショックの年を上手く避けた事もあり、特に国内において海外PhDの就職が厳しいという噂が(少なくとも非アカデミアにおいては)正しくない事を知った。企業にもよるが、留学について、研究について、そして今後の人生設計について耳を傾けくれるところは意外に多く、国内外、複数の企業や職種から選択を迫られる形になった。そして自分なりに検討を重ねた結果、博士課程を始めるまでは思いもなかった決断をする事になった。30年後の自分が振り返ってそれが正しい選択だったと思えるかどうかは今現在わかり得ないのでしておくとしても、自分のパースペクティブを広げ、以前は思いもよらなかった発想を与えてくれたという意味において、この留学生活は非常に貴重なものであった。そして、公においても私においても世界中の人々と対等にコミュニケーションを取る肌感覚、世界のトップレベルの競争に直に晒される経験、そしてそこから生まれる打たれづよさと自信を日本のアカデミアで得るのはおそらく難しいだろう。

学位留学というのは(他の全ての選択と同様)自分の人生の投資である。そういう観点から言えば、この投資に必要なコストは物理的にも精神的にも決して小さくはない。また、どんな投資でもそうだが、それが吉と出るか凶とでるかとはわからないし、そのリスクの度合いは人によりまちまちでそれ故その投資をするべきかどうかは本人次第である。ただ、本来なら投資すべき人がそのオプションを知らず、もしくはオプションとする事ができず、それによって人生に制約を受ける事があるとすれば、それは非常に「もったいない」と思う。

ご存知の通り、中国、インド、そして韓国からの留學生の数は圧倒的に多く、特に総人口を鑑みると韓国からの留學生数の近年の増加ぶりは眼を見張るものがある。中国、韓国の事情を留學生たちから直接見聞きする限り、日本からの留學生が少ないことは必ずしも悪いことではなく、日本の研究・高等教育環境が相応に高いレベルのものであることの証拠であるようにも思える。中国や韓国ではすでに多くの留學生や留学経験者がおり、ネットワークも情報も充実しているため、米国留学はそれらの国の高校生や大学生に取って身近な、あるいは時として必須なオプションである。余談だが、中国人留學生の話を知っていると、中国では日本で大学へ行くような感覚で院留学をするようで、研究室の中国人留學生に、終了後は主婦になりたい、と(おそらく本気で)言っている学生さえいる。また、韓国では国内の大学の学歴では不十分と考えられており、高学歴思考の親たちはなんとしてでもアメリカ等の大学(時には高校)に入学させる傾向があるという話を聞く。当然それによるストレスなどの社会問題も発生しているようである。

日本ではロールモデルも情報も少なく、渡米してからも学位を取得してからも自分で手探りでやらなければならないことが未だに多い。今後もしばらくは、留学を志す学生はフロンティア精神が必要だろう。ただ、私の見知る限り、フロンティアとなるための壁を突破できる若者は多いように思える。彼らが今、必要としている物、つまり日本が今、必要としている物は、それをサポートするためのシステムと周りの援護ではないだろうか。もし私でそれに関与できる事があればなんなりとしたいと思うし、米国大学院学生会もそのための組織として今後活躍を期待している。

学科紹介

Carnegie Mellon University 飯山悠太郎

初めまして。Carnegie Mellon University Department of PhysicsのPh.D.プログラム2年めに在籍する、飯山悠太郎と申します。2009年の春に日本で学部(物理学)を卒業し、同年夏より当学科に所属しています。CMUそして物理学科を簡単に紹介させていただきます。

1. CMUと周囲の環境

CMUのメインキャンパスはペンシルバニア州の西端に近い、ピッツバーグという街の郊外に位置しています。ピッツバーグはかつての鉄鋼産業の中心地で、現在は廃退した街として認識されることもありますが、実は様々な住環境ランキングで常に高順位(2010年のForbes, Yahoo!では全米一位)を獲得している、利便性・安全性・豊かさを兼ね備えた地方都市です。重工業の衰退からの街の経済的な復興を支えた一つの要因がハイテク産業だと言われており、その背後にはCMUのSchool of Computer Scienceがあります。ですので、CMUでは地域全体の発展の原動力としての自負が大学全体に漂っていて、そのような前向きな空気は心地よいものです。



2. 物理学科の全体像と研究内容

物理学科には35名の教授/助教授と70名程度の大学院生がいます。学生のうち外国人の割合は半数以上を占め、その多くが中国語圏から、次に多いのがインドからの学生です。毎年10から15名程度の学生が入学し、その70%程度が卒業します。

教授と学生の人数比からも明らかのように、各研究室には常に多くて2,3人しか学生がいません。理論の「グループ」では特に教授一人に学生一人(もしくは0人!)ということがよくあります。これは「産・官・軍」のうち産と軍からの予算がつきにくいことと、研究が小規模と超大規模(多数の大学が参加)の両極端になりがちであることから来ます(米大学院の資金システムについては「かけはし」12月号をご参照ください)。現在、学科で行われている研究は大きく6分野に分かれます。それぞれを簡単に紹介します。

(次ページに続く)

学科紹介 (続き)

2.1. 宇宙物理

宇宙物理は文字通り宇宙そのものを、巨大な入れ物としてだけでなく、それ自身ダイナミックな物体として捉える研究分野です。CMU物理では4つのグループが宇宙物理を研究しており、うち3つが計算機を用いた宇宙発展のシミュレーションを専門としています。

2.2. 高エネルギー物理

高エネルギー物理は、日本ではよく素粒子物理とも呼ばれ、物質を構成する究極の基本粒子を研究する分野です。実験が大学ローカルでないのがこの分野の特色でもあり、5グループのうち私のいるグループを含めた4つは、LHCというジュネーブにある最新鋭の粒子加速器を用いたプロジェクトに参加しています。一方、理論のグループは研究場所は当然ドメスティックながら、研究内容を素粒子に留めず、宇宙論や物性・生物物理に広がっています。素粒子理論の手法を用いて多分野の問題を新たな切り口で捉えるという研究スタイルが特色です。

2.3. 中エネルギー物理

中エネルギーというのはあまり他では聞かれない名前ですが（同様の研究内容はよく原子核物理、またはハドロン物理と呼ばれます）、CMUでは長年この名が使われ、定着しています。4グループがバージニア州にあるジェファーソン研究所で、陽子・中性子とその仲間である「ハドロン」の性質を研究しています。

2.4. 生物物理

この学科で近年一番発展を見せているのが生物物理です。対象は主にウイルスや生体膜、DNA分子の力学・熱力学的性質で、4グループが実験、3グループが理論を研究しています。生体膜研究では長年、X線散乱という固体の結晶構造を見るために開発された技術を用いる手法を用いており、高い専門性を誇っています。

2.5. 物性物理

物性物理は、原子や分子といった物質の構成要素が多数集まったときにどのような振る舞いをするか、という問いに答える分野です。当然、物質の性質の多様さを反映して研究内容も極めて多様になります。CMU物理では、近年、大変活発に研究されているグラフェンをはじめ、磁性体、結晶成長、固液界面などが研究されています。

2.6. 量子物理

量子基礎理論とも呼ばれ、量子力学を、現象を理解する道具としてではなく、それ自身一つの数学的公理体系として理解しようとする分野です。近年ではアカデミックな関心に留まらず、量子暗号・量子コンピューターといった応用の実現可能性も見えてきており、特に暗号の研究という点で軍が強く関心を持っているようです。

3. プログラムの流れと学生生活

次に、プログラムの流れをのぞいてみましょう。おおまかには「かけはし」12月号に紹介された通りですが、所々独特な部分もあります。

特筆すべき点は、CMUに限らず私の知っている物理学科ではどこも、入学の段階では、まだ学生が自分の研究分野を特定できていることを求められていない点です。このためCMUでは、所属グループの決まっている学生を含めて全員が最初はTAを勤めます。（ただし語学のレベルが足りない外国人学生は採点のみの仕事を任せられます。）二学期めには、どこか一つのグループで「お試し」研究をするというコースが設けられます。ここでは、それなりのコミットメントが求められる上、ローテーションがないのである程度慎重に選ぶ必要があります。たいていの学生はこの段階でグループを内定するわけですが、これは教授にとっても「お試し」であり、学期の終わりに適性がないと判断されてしまう場合もあります。「グループに正式に所属する＝雇用関係」ですので、この辺りは厳格です。

Qualifying examは、2年めの始まる直前に筆記、次の冬に口頭でそれぞれ行われます。再試験もありますが、両方に合格できなければ学科から除籍されてしまいます。また、二年めに入ってもまだまだコースワークがみっちりあります。学生は二年間で最低でも8科目（×週3回の講義・演習・宿題）を全てB以上の成績で終える必要があり、多くの場合10科目ほどこなすことになります。必然この間フルタイムで研究できるケースは稀で、多くの学生はまだTAを勤めます。

「勉強」から「研究」に重心が移るのは、早い学生で二年めの冬から、遅ければそのあとの夏からとなります。そこで研究の大まかな方向性が決まりはするようですが、博士論文のトピックが決まるまでにはさらに1年から2年を必要とするケースがほとんどです。この学科での卒業までの平均年数は6年と言われています。

最後に学生の日常について少しだけお話しします。時間的な制約があるグループはないようですが、朝に来て夕方に帰るといったのがだいたい全員の常識です。毎日午後4時にティータイムがあり、多くの学生がリラックスする貴重な機会として活用しています。上述したように「ラボメイト」を持たない学生が大半ですので、ティータイムでその日初めて口を開いた、などということもあり得ます。2週に一度、金曜の夕方にはビールとピザが振る舞われる簡単なパーティがあります。普段話さない相手、特に異分野の教授などと交流できるいい機会です。

以上、書いてみるとシビアな環境のようにも見えますが、本学科は一定の緊張感がありつつ学生-学生そして学生-教授の距離が近い、とても居心地の良い場所です。CMUへの興味が（物理に限らず）ありましたら、気軽に飯山fyamaboss@gmail.comまでお声かけください。もちろん隣接するU. of Pittsburghに関してのお問い合わせでも結構です。



<ミシガン州について>

ミシガン州は、アメリカ北東部に位置し、北はカナダのオンタリオ州に接しています。アメリカではこの地域を「中西部」と呼びますが、実際はかなり東寄りにあり、ニューヨークやボストンなどへは、飛行機で約1時間半、(体力と気力があれば)車でも12時間ほどで行くことができます。実際、僕の友人は休暇にガールフレンドに会いにボストンまで車で行っていました…。

<アナーバーについて>

私が通うミシガン大学のある町アナーバー (Ann Arbor) は、デルタ航空のハブ空港として有名なデトロイトメトロポリタン空港から車で30分ほど西に行ったところにあります。一般的には、全米有数の治安の良い街、緑の多い街、教育レベルの高い街 (なぜかはわかりますね!)、比較的裕福な人が多く住む街として知られています。

<治安の良さ>

治安に関しては、文句なしに良いです☆たまに強盗や空き巣などはありますが、発砲や殺人は、私がミシガンにいる数年間ゼロです。ミシガン大学では、DPS Crime Alertと言って、何か事件があると大学から警告メールが来るようになっていますが、ほとんど来ません。アナーバーに住んでいる人に聞くと、冬が寒くてホームレスなどがいないから治安が良いのだそうです。



<学園都市>

アナーバーの人口は約11万人ですが、ミシガン大学の学生が6万人、その他職員等が2万人いるので、人口の7割がミシガン大学の人間で構成される学園都市です。このため、学生にとってはとても住みやすい環境で、大学バス「Blue Bus」(写真1)が約15分間隔で走っている他、公共バスも学生証を見せれば無料で乗れます。また、全米有数の大学病院であるミシガン大学病院も、学生保険を払っていればかなり割安に利用することができます。キャンパス内とキャンパス外の敷居はほとんどないに等しく(看板がある程度です)、街全体がキャンパスのように感じます。さらに、適度に都会&田舎であるため、物価も平均的で学生にとってはまさに天国のような環境です。

<気候>

夏は暑いものの湿度が低く過ごしやすく、長袖でも汗ばまない程度です。秋は紅葉がとてもきれいで、紅葉が始まると多くの人がカメラを手に写真を撮っています(写真2)。ですが、11月下旬頃から始まる冬は少々厳しい環境です。1月~2月は曇りや雪の日が多く、気温も低く吹雪く日すらあります。とはいうものの、日本と違い、アナーバーでは、屋内は全て20度に保たれているので、移動時を除けばあまり寒さの影響はありません。マイナス10度の屋外から20度の屋内に入る瞬間の快感はすばらしいですよ!3月の始めには雪もおさまり、だんたん春が近づいてくるのを感じることができます。一度だけ4月に雪が降りましたが、例年4月以降雪が降ることはあまりありません。



<おすすめスポット>

キャンパスと街が敷居なく共存していることから、キャンパス内に美味しいレストランがたくさんあり、勉強で疲れた平日の夕方や週末は、学生でレストランがいっぱいになります。アメリカ料理もちろんですが、中華料理や韓国料理も評判が良いのが特徴です。日本料理店も何件かあり、なぜか女の子の名前(サイカ、ミキ)が多いです。中でもセントラルキャンパスにある「Sadako」は、平日でも予約なしでは入れないほど大人気です。味は…まあまあです。カレーやうどんといった家庭的な日本料理が食べられるのが魅力です。私は毎回必ずカツ丼を食べます。夏から冬にかけて、アメリカでは大学フットボールが非常に熱い時期で、ミシガン大学も例外ではありません。秋学期は毎週土曜日に大学チーム「Wolverines」の試合があり、ホームゲームの週末は真っ黄っ黄のTシャツを着た学生で街がいっぱいになり、facebookもTwitterも、チームの応援の掛け声「Go Blue!」で溢れます。WolverinesのホームスタジアムはThe Big Houseと呼ばれ、収容人数10万人超の超巨大スタジアムです(写真3)。卒業式等もここで行われ、私が学部を卒業した年にはオバマ大統領が演説に来ていただきました。(写真4)

また、アナーバーではありませんが、車で40分ほど行ったところに、日本人が多く住むNoviという街があり、日本の食材が売っているスーパーや、日本食レストランが多くあります。たまに贅沢をしたいときにこのスーパーに行って、たけのこの里やハンバーグ弁当などを買うのが、ミシガン大学の日本人学生達の至福の瞬間の1つになっています。

中西部特有ののんびりとした雰囲気を持ちながらも、何年住んでも飽きない街はアナーバーだけではないでしょうか。デトロイトに立ち寄ったら、一度訪れてみて下さい。



米国 大学院 学生会

ウェブサイト

<http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

小野 雅裕
原 健太郎
平林 正稔
工藤 朗
石原 圭祐
大勝 裕子
大久保 達夫

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、留学体験記や各種のコラム(わが街紹介、学科紹介、お薦め本等)を執筆してくれる方を募集しています。

ご興味のある方・お問い合わせ等は、上記編集部までご連絡下さい。

お薦め本

『明治・父・アメリカ』 星新一・著 (新潮文庫)



この作品はショートショートで著名な星新一が、その父である星一（ほしはじめ）の半生を描いた作品です。星新一の父親は実はアメリカ留学の大先輩なんです。さらに、知る人ぞ知る人物で、東洋一とされた製薬会社を創設し、大学の創始者であり、野口英世のパトロン、さらには衆議院議員でもありました。明治の日本の勃興を支えた偉人であることは間違いありません。

そんな偉人であっても生まれたときから偉人であったわけではありません。星一は福島の農村に生を受けました。勉強熱心であった星一は向学心に燃え上京し、それには飽きたらず一念発起、渡米します。明治の初めのアメリカで星一を待っていたものは苦しくも希望に満ちた世界。そこで、野口英世、後藤新平、新渡戸稲造など一つ一つの出会いを大切に、挫折を繰り返しながらも知恵と勇気を持ち前の明るさを糧に自分の信じる道に向かって努力します。足掛け12年に及ぶ星一のアメリカ生活を綴ったこの作品は、異国の地で苦労を重ねる人々に少なからぬ勇気と頑張るヒントを与えてくれます。

嶋津 直之 (Northwestern University)

編集後記

・読み書き・文法を重点に置いた英語勉強法だけでも、会話に重点を置いた勉強方法だけでも英語は上達しません。大事なことは、何よりも英語を「使う」「触れる」こと。生活や文化があってこそその言語。日本に興味がなく日本語を勉強している外国人は皆無です。全く違う環境に飛び込むことを楽しみ、留学する・したい国・地域に興味を持つことが大事なのではないか、と思う留学一年目。(kh)

・6月号から本紹介及び留学体験記のコーナーを担当させて頂くことになりました大勝裕子です。昨秋学期入学しましたPhDコース1年生で、アメリカでの生活、講義、研究など、やっと慣れてきたところです。良いものを毎月お届けできるよう、また、執筆して下さる方々に気持ち良く寄稿して頂けるように努力していきたいと思っております。よろしくお願い致します。

・今月号から編集作業をお手伝いさせて頂くことになりました石原圭祐です。今回の震災を受け、僕の在籍するハーバード大学内でも日本人学生会やその他多くの学生団体により被災地支援のための募金活動、チャリティコンサート、専門家を招いたシンポジウムなどが継続的に行われています。世界中の人々の日本を応援する思いに、感謝の気持ちでいっぱいです。

harvard.edu/harvardforjapan/

・海外で学ぶ我々留学生も、今回の地震に大きく心を痛めております。少しでも力になればと3月、4月と全米各地の大学で募金をはじめとする復興支援のイベントが開かれました。例えば私のいるMIT日本人会にも多くの外国人から日本を支援する暖かいメッセージを寄せて頂きました。詳しくは

<http://web.mit.edu/jam/www/> をご覧下さい。(T0)